

『古代アメリカ』 5,2002,pp.95-102

<書評>

Ritual Sacrifice in Ancient Peru. Elizabeth P. Benson and Anita G. Cook eds. University of Texas Press, Austin, 2001. 211+14pages, 10.95\$(paper back), 45\$(hard cover).

大平秀一（東海大学）

本書は、バークリーのアンデス研究所に所属するエリザベス・ベンソン氏およびカソリック大学人類学部のアニータ・クック氏によって編集された、スペイン侵入以前のペルー先住民社会における人間の犠牲をテーマとした論文集で、構成は以下の通りである。

- 第1章 Why Sacrifice? Elizabeth P. Benson
- 第2章 Decapitation in Cupisnique and Early Moche Societies. Alana Cordy-Collins
- 第3章 Blood and the Moon Priestesses: Spondylus Shells in Moche Ceremony. Alana Cordy-Collins
- 第4章 Blood, Fertility, and Transformation: Interwoven Themes in the Paracas Necropolis Embroideries. Mary Frame
- 第5章 Children and Ancestors: Ritual Practices at the Moche Site of Huaca de la Luna, North Coast of Peru. Steve Bourget
- 第6章 Ritual Uses of Trophy Heads in Ancient Nasca Society. Donald A. Proulx
- 第7章 Huari D-Shaped Structures, Sacrificial Offerings, and Divine Rulership. Anita G. Cook
- 第8章 The Physical Evidence of Human Sacrifice in Ancient Peru. John W. Verano

本評では、各論文の概要をまとめてそれぞれにコメントを加え、最後に本論文集全体および扱われているテーマに関する若干のコメントを述べる。ただし誌面の都合上、序論の役割を果たしている第1章、さらにはパラカスの図像分析を行っている第4章、ワリの構築物を分析した第7章の論文は割愛してある。

「クピスニーケおよび初期モチエ社会における斬首」（第2章、21-33頁）

これまで、ペルー北海岸を中心に精力的な研究を進める、サンディエゴ大学人類学部のコーディー・コリンズ氏による論文である。

著者によれば、クピスニーケの図像で人間の首を獲る存在として表象されているのは、クモ、猛禽、怪物、魚、人間に限定されており、モチエではこれにカニとサソリが加わるにすぎないという。本論文は、いわば斬首者として表象されている存在に多様性が認められることに着目し、その多様性の意味を問おうとしたものである。まず、データが得られているモチエの資料より、ワン

チャコ（モチエ谷）でサソリ、ロマ・ネグラ（ピウラ谷）でクモ、シパン（ランバイエケ谷）でクモ、エル・ブルホ（チカマ谷）でクモ、ドス・カベサス（ヘケテペケ谷）で魚といったように、一つの遺跡あるいは地域から、一つの斬首者のみが確認されている傾向があることから、上述した多様性が、空間の相違すなわち特定の谷、セトゥルメントあるいは集団のパトロンの相違と関連していることが示唆される。

次に、1994年と95年に著者が行ったドス・カベサス出土の資料を基に、これを検証しようとしている。この遺跡からは、実際に18個におよぶ切断された人間の頭部が出土している。大方の斬首は1回でなされず、4~6回の痕跡が認められ、前方から後方に切られたことが確認できるという。さらに同遺跡には、身長135cm程度の老人が、右手に銅製のトゥミを握った状態で埋葬されていた。この老人は、切断された頭骨群と同時期であること、トゥミが実用に耐えるものであること、副葬品の特質などから、斬首執行者と判断されている。著者は、同遺跡から出土している土器に、斬首者として魚が表象されていることから、この老人から魚の要素を見出したいわけだが、結果的にその要素は確認されていない。

モチエ社会の儀礼・犠牲を考える上で、ここに提示された出土資料の重要性は高い。ただし示唆された説は、今後の出土資料による検証に委ねられて論文が終えられている。ところで、著者のいうセトゥルメントあるいは集団のパトロンとは何がイメージされているのだろうか。アンデス地域には、基本的にトーテミズは存在しない。たとえばコーボ神父によって採集された、エクアドル南部のカニヤリ族の起源神話をみると、人間の女性に化けたパパガーヨから同民族集団が生まれていくことになっているが、そのパパガーヨはヴィラコチャによって遣わされたものである[Cobo 1964(1653),Lib.13,Ch.2]。いうまでもなく、斬首者として表象されている生物は、アンデスの宗教的論理・世界観の中に位置付けて考える必用がある。たとえば、クモ、サソリは活力に満ちた生命あるものを食し、場合によっては地下性に繋げて考えることも可能であろう。こうした世界観の一部が表象されているテーソのオベリスクには、多くの生物が一度に示されている。今後、複数の斬首者の表象が、一つの地域・遺跡から出土してくる可能性も否定できない。またモチエにおける斬首者の表象には、著者が確認しているものに加え、フクロウやコウモリも認められる。

「血と月の女性司祭：モチエの儀礼におけるスpondeiLス貝」（第3章、35~53頁）

第2章と同じ著者による論文である。スpondeiLス貝（ムユ）は、遅くとも古期以後、一貫して儀礼的意味合いを有し、形成期以降には図像としても表象されている。ところが、出土事例が確認されてきているとはいえ、具象的な図像を残しているモチエにおいて、その表象が認められない。本論文の第1の焦点は、モチエの図像の中にムユを求めることがある。著者は、ムユの女性性に着目し、図像に描かれた「高位の」女性の中にムユを見出そうとしていく。サン・ホセ・デ・モーロ（ヘケテペケ谷）に埋葬されていた女性司祭の装身具との類似性より、「生贊の儀礼」、「アシ舟の儀礼」を司っている人物を女性と判断し、これを分析対象としている。ムユに関しては、モチエの土器でその色（赤色）を他と区別して示し得ないことから、カップ型の形状とトゲに着目している。結果的に著者は、捕虜の血を集めることを目的とし、女性司祭が手にしているカップ状容器、さらには同様の人物が乗った、トゲ状のラインが突き出た三日月型の舟をムユと判断する。判断の根拠は、女性司祭の腰部に、ムユの採取に使用された錘が表現されていることにある。そして、後述するようなマヤの儀礼におけるムユの使用状況も背後にイメージされているといつてよ

い。

女性司祭の墓および表象は、気候変動を要因とするモチエの激動期に限ってみられるという。著者は、この時期におけるモチエ社会の多様な変化の中にメソアメリカとの関連性を見出し、信仰における影響も示唆しようとする。これが、本論文の第2の焦点となる。マヤのボナンパクの壁画において、女性が犠牲の血をムユで受けており、その女性が月の神と関連していることを引き合いに出した後、モチエにおいても月の神信仰が存在したこと提示する。そこから、ムユ、高位の女性、血、銀、月の象徴的関連性を見出し、これがマヤと同様のシンボリズムであることを指摘する。さらにモチエ末期になって、女性司祭が男性性を帯びてくるようになることを考察し、マヤの瀉血の儀礼において、男性が女性の衣服を纏っていることも提示される。

本論文で最も意識されていることは、モチエの信仰におけるマヤの影響を指摘することにあると判断してよかろう。すでに形成期の神殿（クントゥル・ワシ）から、ムユのビーズが副葬された「高位の」女性の墓が検出されていることは、この説と相反するデータの一つとなるだろう。さらに、著者が図像中のカップをムユと判断する根拠となっているラ・プラタ島出土の潜水用錘は、発掘者によって「溝が施された手榴弾型の石」として報告されている[Marcos y Norton 1981: 148]。しかし、評者がエクアドルの博物館で確認したところでは、明らかにボレアドーラであった。性差に着目した本論の視線そのものは悪くない。モチエIV期における女性司祭の存在は、これまでも指摘されている[Hocquenghem and Lyon 1981]。また評者は、性差による楽器使用の変化に着目した修士論文（1990年度早大大学院文学研究科）において、同時期における性差の役割変化を指摘したことがあるが、そのデータとも一致してくる。

「子供と祖先：モチエのワカ・デ・ラ・ルナにおける儀礼」（第5章、93–118頁）

本論文の著者は、ワカ・デ・ラ・ルナの発掘調査を行ってきた、東アングリア大学センズベリー研究所のブルジェ氏である。6度にわたる拡張・改築が確認されている同遺跡の中で、モチエIV期において短期間に内に建設されたプラットフォームIIおよびそれに面する広場3Aの調査がなされ、前者において4つの司祭の墓、後者において犠牲に捧げられた多数の遺骸が検出されている。本論文では、出土資料を基に犠牲の諸特徴が提示された後、子供の犠牲を中心に取り上げ、図像分析を加えて、祖先、儀礼的戦争、犠牲者の捕獲、犠牲が、概念的に繋がっていることを示唆している。

まず犠牲者が広場北西の自然岩周辺においてのみ確認されていることから、この岩を神聖視していたことが指摘されている。犠牲者は、大きく2つのグループに分けられる。一つは下層に位置する乳児1体および2歳半～3歳半程度の幼児2体で、後者2体は頭部がなく、内1体の両手には笛が握られていた。頭部は、埋葬前に切断されたと判断されている。もう一方は、上層に位置する年齢15–35歳の戦士である（第8章ベラーノ論文の項参照）。遺骸が拡散したり折り重なっているため不明瞭としながらも、犠牲者の数は約70名程度と推測されている。これらは、殺害されてそのまま放置されていた状況が確認されており、激しい雨季の最中および雨季の終了後に捧げられたと判断されている。

著者は、同じ場所から出土しながら、異なる性質を帶びた戦士の犠牲と幼児の犠牲の関連性を問うため、特に幼児側に的を絞って図像分析を進めていく。土器に表象された子供は、笛を吹いた女性、骸骨（笛付き象形壺）、擬人化されたコウモリによって、目を閉じた状態で抱えられており、

ここから笛、女性、死、コウモリ（犠牲執行者）というキーワードが挙げられる。次に、やはり子供を抱えた女性を首部に象形し、棍棒を手にして網を背負った男性を胴部に描いている土器（以下土器Aと呼ぶ）1点に着目する。これと同質の棍棒が使用されていることから、シカおよびアシカ狩りの図像に分析が展開し、まずこれらの表象が儀礼的戦争および犠牲者の捕獲に関連しているというこれまでの説が確認される。そして、土器Aで男性が背負った網を狩りまたは漁のためのものとし、子供を抱えた女性の象形を伴う土器Aにシカ・アシカ狩りと同質の内容が示されていると考える。さらにシカおよびアシカ狩りの図像にも、女性が埋葬と関連した壺等を伴って描かれていることから、女性が、遺骸、副葬品、犠牲者の準備、子供を運ぶ役と関連しており、埋葬儀礼（上層の子供）と犠牲（下層の戦士）に密接な関係性を指摘することになる。戦士の犠牲者の胸上などからアシカの歯や骨が出土していること、プラットフォームIIにおいて、血の付着した棍棒が犠牲執行者の墓に副葬されていることなどから、シカ・アシカ狩り・犠牲者捕獲のための戦争・戦士の犠牲の密接な関連も再確認されている。さらに著者は、笛が、犠牲執行時あるいは埋葬時などに吹かれ、犠牲者を祖先に送る合図と考えている。また、遺跡の空間的特徴、遺骸および遺物の出土状況にみられる二元性も指摘している。

さて、犠牲・儀礼をめぐる諸状況を考察する上で、ここで提示されている発掘データの重要性に疑問を挟む余地はない。また、扱われている本論のテーマも、犠牲の多様性を解釈しようとしている点で意義深い。やや気になったのは、図像の解釈である。本論では、女性と棍棒を通して、分析する図像が繋げられているが、ここで誤った判断をすると得られた結論を再検討する必用が出てくる。笛を吹いている人物は、女性なのだろうか。民族誌的に、楽器は性差による使用が厳格に制限されているケースが多い。筆者の知る限りにおいて、アンデス地域では、女性の墓から笛の類（気鳴楽器）が出土している事例はない。同様に、明瞭に女性と判断されるスペイン侵入以前の表象において、笛を吹いているものは存在しない。女性と関連する楽器は、タイコのみである。こうした特徴は、現在にいたるまで、アンデス地域はもちろんラテンアメリカ地域全般にみられる傾向ではないだろうか。また、不明瞭な解釈が認められた。子供と祖先は、どのように繋げて捉えられているのだろうか。笛を祖先に送る合図と判断している根拠も不明瞭であった。著者が、死を祖先のみに直結する概念とイメージしている可能性もある。確かにアンデス地域における明瞭な祖先崇拜は、インカ時代には認められ、その後少なくとも18世紀においても確認できるが [Salomon 1987]、モチエに存在したことを説明する記述が欲しかった。

「古代ナスカ社会における首級の儀礼的利用」（第6章、119～136頁）

著者は、60年代から前期中間期を中心に研究を行ってきた、マサチューセッツ大学人類学部のブルー氏である。図像データを中心に、ナスカ社会と首級の概要、首級と戦争との関連、首級の儀礼的利用、ナスカの宗教における首級の意味という順で記述されている。

ナスカの首級は、神話的人物、神話的シャチ、恐ろしい鳥と関連して図像の中に表象され、実際に100を超えるミイラ化した首級が出土しているという。首級は、鋭利な黒曜石製ナイフで頭部が切断され、棍棒状の道具で頭骨下部を破壊して脳を取り出した後、額に紐を通すための穴を穿ち、ワランゴのトゲで唇をふさいで作られているという。内部にトウモロコシや落花生、パカエ、サボテンなどの植物を詰め込む事例も確認されている。

著者は、戦闘を示した図像の中に斬首の状況も示されていることから、ナスカにおける戦争の目

的の一つが首級を得ることにあったとし、斬首は戦争時においてなされたと考えている。これまでナスカ社会の中心的構築物と考えられてきたカワチが、政治的意味合いをもたない、単なる儀礼センターにすぎないと解釈されていることから、こうした戦争は、水利権や農地をめぐる多様な首長制社会間の争いであったと述べられている。

図像の情報を基に、ナスカでなされた儀式の主たる構成要素として、1) 音楽（土製アンタラ、トランペット、タイコ、がらがら）、2) 儀礼的飲酒と幻覚作用のある薬品の摂取、3) 首級の利用、4) 聖地（カワチ等）への行進が挙げられている。ミイラ包みの周りでアンタラを吹きながら首級を持っている図像に依拠し、死をめぐる儀礼における首級利用が指摘されている。また斬首された遺骸に副葬されていた事例を挙げ、首級象形鉢も同様の儀礼に使用された可能性も示唆している。首級は、儀礼的に一定の場所に埋められており、数は3、4個から40個以上におよぶという。壺の中に収められていた事例も確認されている。連続的に多くの首級を描いた図像が、首級の儀礼的埋葬を象徴的に現している可能性も指摘されている。著者は、ナスカの宗教が幻覚剤を使用したシャーマンによって司られた呪術的側面の強いものであり、首級の口から植物が生えた図像があることから、首級は象徴的に再生を意味し、植物の代替としても捉えられると考えている。

本論は、図像の情報を一面的に捉えていたにすぎず、記述の脈絡も欠如している。このため、一応論文の形式をとっているとはいえるが、ナスカの首級に関する概要的記述に留まっている。ナスカに関してはデータの蓄積が遅れているとはいえる、多様な資料を多面的かつ重層的に考察していくことが可能なはずである。

「古代アンデスにおける犠牲者の肉体的痕跡」（第8章、165～184頁）

近年、中央アンデス地域出土の人骨をめぐって、形質人類学的調査・分析を精力的に進めているテュレイン大学人類学部のベラーノ氏による論考である。主として、ペルー北海岸のパカトナムーとワカ・デ・ラ・ルナから出土した犠牲者の分析事例が提示されている。

まず前者では、ワカI（1100-1400）として知られるピラミッド状建造物の入り口付近から出土した14体の犠牲者が分析対象となっている。これらは、足首付近および手首を結ばれていた痕跡が残存し、ふんどしのみを纏ったいわば裸体の状態で、死後そのまま放置されていたことが出土情報から得られている。骨の分析を通じ、突かれた傷、（力強く）切られた跡、骨折などの多数の外傷、喉をかき切られた跡、斬首の跡、胸を切り開かれた跡などが確認され、15～35歳の男性と判断されている。こうした状況から、これらの犠牲者は、戦争で捕獲された人々であると考えられ、しかも興味深いことに、他地域出土の骨と比較しながらコラーゲン同位分析がなされた結果、食事構成の相違が浮かび上がり、外部の人間であることが示唆されている。

一方、後者から出土した約70体におよぶ犠牲者は、完全な状態のもの、首や四肢のないもの、四肢のみ、骨の断片という4つに分類されている（第5章ブルジェ論文の項参照）。分析の結果、これらはすべて若年男性（15～39歳、平均23歳）で、病的な問題のない健康な人間であったという。しかし多くの外傷痕が検出され、すでに治癒した骨折および陥没骨折が18体に認められることから、活発で、暴力と関連した生活を送っていた人々（戦士）が想起されている。また11体では、外傷を受けて1週間から1ヶ月を経た骨折が確認されており、これを戦争で捕獲されてから犠牲執行までの期間と判断することも可能だとしている。さらに死亡時の外傷として、頸椎を切り込んだ痕跡およ

び鈍器で強打されたことによる頭骨骨折・破碎が確認されている。切り込んだ痕跡は、分析可能な骨の75%に認められ、概して第2、第3頸椎前方に残存しているという。横方向に刃物を1~9回動かしたことも明らかになっている。これらの痕跡は、斬首ではなく喉をかき切ることを意図したものと判断され、儀礼と血との関連が指摘されている。これらの骨の中には、白骨化以後の傷もあり、これに関してはコンドルのような腐肉食性の鳥との関連性が示唆されている。広場3Aに隣接する広場3B出土の犠牲者7体に関しても若干触れられているが、それらには骨から肉を削ぎ落とした痕跡が確認されていることから、時期尚早と断りながらも、カニバリズムの可能性に言及している。

本論文で提示されている分析結果は、犠牲者が受けた処遇を浮かび上がらせていると共に、これまでアンデス先史学者が蓄積・提示してきた解釈を再確認させる資料となっている。同遺跡・地域の犠牲者は、相当手荒な扱いを受けているようだ。著者によれば、モチエにおいて、いわゆる頭骨の杯が確認されており、まだ肉が付着した状態から加工されたものだという。宗教的論理に基づき、自己の民族集団の成員を犠牲に捧げるのであれば、「捕獲」から犠牲執行にいたるプロセスにおいて、手荒な扱いは不要であろう。コラーゲン分析等によって示唆された内容は、同時期のペルー北海岸における社会間の戦争と犠牲者捕獲の関連性を確実なものとしている。物的なものではないが、衣服が魂そのものであると考えれば、犠牲者が裸体の状態にあることも手荒な行為と考えてよい。著者が言及している腐肉食性の鳥は、コンドルではなくガリナソであろう [Ravines 1990]。

以上、本書に収められた5本の論文の概要とそれに対する簡単なコメントを述べた。アンデスの先住民たちは、なぜ人間を「神々」に対して捧げる必用があったのだろうか。この問いに答えるためには、彼らの世界観すなわち宇宙における人間の位置付けをつぶさに考察していく必要がある。おそらく本書の第一義的意味は、新たな資料の提示とその解釈における構成の中にこうした視点を前面に出した論文が加えられれば、一層内容の濃いものとなつたであろう。しかし、全く文字資料をもたない時期の中にのみ閉じこもって、こうした考察を行おうとしても限界がある。できれば文字資料を通じた分析が可能な、インカ時代や植民地時代の論文も加えて欲しかった。

また、地域や時期による多様性がもちろんあるとはいえ、上述した視点をめぐる研究には、通時的考察がなされてもよいだろう。70年代、ゴードン・ウィレイは「ペルー文化伝統（Peruvian Cultural Tradition）」という概念について述べている [Willey 1971: 88-89]。決してこれを受けたわけではないが、80年代を中心に民族学者たちは、多様性の中にも脈々と流れる「アンデス的なるもの（lo andino）」を追った。本書の中だけでも、こうした継承性が見え隠れする部分が少なくない。たとえば、第2章の論文で斬首の執行者として捉えられている身長135cmの老人は、肉体的に他と極端に異なる特徴を持った者が、超自然的存在と人間を繋ぐ役割を果たしていたという、少なくともインカ時代から現代まで認められる特徴に一致する。第5章の論文では、犠牲の執行が自然岩周辺のみでなされていた。アンデス地域における石や岩の意味・重要性はここで繰り返すこともないだろう。オケンジェム [Hocquenghem 1987] によるモチエの図像分析は、通時的考察を加えながら解釈している点において興味深い内容となっているが、同時期・同地域の社会を扱っていながら、本書ではその成果があまり引用されていなかったような印象も受けた。とはいえ、科学的データに基づき、アンデス地域における人間の犠牲にテーマを絞った論考を一冊の書物にまとめたのは、おそらく

く本書が最初であろう。今後、資料がさらに積み重ねられ、同テーマの理解がさらに進むことを期待したい。

引用文献

Cobo, Bernabé

1964 [1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, tomo XCI-XCII, Ediciones Atlas, Madrid.

Hocquenghem, Ana Marie

1987 *Iconografía Mochica*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima.

Hocquenghem, Anne Marie and Patricia J. Lyon

1980 A class of anthropomorphic supernatural females in Moche iconography. *Ñawpa Pacha*, vol. 18, pp. 27-48.

Marcos, Jorge y Presley Norton

1981 Interpretación sobre arqueología de la Isla de la Plata. *Miscelánea Antropológica Ecuatoriana*, Boletín de los Museos del Banco Central del Ecuador, no. 1, p. 148.

Ravines, Rogger

1990 Los Gallinazo de Pachacamac. *Boletín de Lima*, No. 72, pp. 30-31.

Salomon Frank

1987 Ancestor Cults and Resistance to the State in Arequipa, ca.1748-1754. In *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World, 18th to 20th Centuries*, ed. By Steve J. Stern, pp. 148-165, The University of Wisconsin Press, Wisconsin.

Willey, Gordon

1971 *An Introduction to American Archaeology*. vol.2: South America. Englewood Cliffs, New Jersey.

